自分は何に興味があり、何が好きなのか考えてみませんか

那須　崇夫（進学情報センター初代教官）

進学情報センターニュースが 100 号を迎えるにあたって、進学情報センターの開設に携わった関係から、進学先の選択に臨む学生諸君のために何か書く様にご依頼を受けました。専攻を決めるということは人生に大きな影響を与えることになるので、思い悩む人が多いと思います。もう 70 年も前になってしまいましたが、私自身も学生として進路の選択を迫られて悩んだ経験があります。当時は進学関係の業務は教務課が扱っていて、進学先の各学科の情報は学生に提供されず、私たち学生は講義を通じてわずかに知った各学科の内容と、教務課が公表する前年の各学科の応募状況や進学者の最低点と自分の成績との比較で進学先を選ぶしかありませんでした。人気のある学科は年によっても違い、今年はどうなるのか賭けの様な状況で、希望が叶うのかどうか心配しました。

自分が好きなこと、興味のあることについて学び、長い人生それを基にして仕事を続けて生きていければ幸せなことです。進路の選択の機会に、意外と知らない、自分は何が好きか、何に興味があるのか、自分自身を見つめて欲しいものです。そうは言っても、ただ頭で考えているだけでは多分わからないだろうと思います。

最近の進学情報センターニュースを拝見して、ゼロから出発し 30 年以上経過した進学情報センターは随分充実したものになったなと感じました。様々な形で提供される進学情報をフルに活用してみて下さい。「面白そうなことをやっているな」というものが見つかることでしょう。それに関連することを調べていくと興味がさらに深まって、自分もこの様な仕事を続けて行きたいという気持ちまでなるかもしれません。進学先を決めるに当たって直接相談もできますし、進学情報センターは頼りになる存在だと思います。

進学情報センターの 35 年 ～変わったことと変わらないこと

青木　優（進学情報センター）

今回、寄稿していただいた那須崇夫先生は、昭和 63 年（1988 年）に、「進学情報センター」の前身である「進学相談室」の担当教官となった。平成元年（1989 年）10 月 1 日、「進学相談室」を拡張・改称する形で「進学情報センター」が誕生したのだが、那須先生はこの改組がなされる過渡期を支えられた方である。ご退官となる平成 6 年までの 5 年間で今ある進学情報センターの礎をつくったといってよい。その時のご苦労を「ゼロから出発」の一語で済ますことはあまりにもしのびない。差し出がましいのは承知のうえで、私が那須先生のご功績の数々を、「進学情報センターの今」と比べながら紹介したいと思う。

ほぼ平成と共に開設された進学情報センターは、平成 2 年 4 月に、駒場キャンパスのシンボル、時計台の根元、1 号館 2 階に居を構えた。当時評議員だった原田義也先生が、駒場キャンパスの一等地にセンター設立のため場所を確保してくれたと聞いている。1 号館の改修工事に伴いこの半年ほど 17 号館に一時移転していたが、専任教員が文系と理系の二人体制になり、面談室が一部屋から二部屋に増えた以外には居場所は変わっておらず、進学に関わる各種情報を提供する資料室、資料準備室（事務室）、個別の相談をする面談室（現在は 2 室）というスタイルは今も維持されている。開設当初より情報公開を積極的にすることを旨としており、資料室に、当時最先端のパソコン 10 台を導入し、進学振分け状況など学生にとって極めて有用な進学情報が格納されている端末が用意された。近年個人情報保護の観点から、データの提示形式は変わっているが、今もこの積極開示への取り組みは変わっていない。

センターの店開きと同年に、第 1 回シンポジウム「生命科学へのアプローチ」が開催された。進路選択に参考になるようなシンポジウムの開催は、「私はどのようにして進路を決めたか」と名称を変え、全ての前期課程学生の進路選択に参考になるような形式となって続いている。2020 年コロナ禍初年の時は開催を危ぶまれたことがあった。しかしながら、レッドステージ（キャンパス内の入構が禁止された状態）で対面開催ができない中、Zoom を用いたオンライン

開催に急遽変更することで、より魅力的なシンポジウムに生まれ変わった。講演者のシンポジウムへの参加障壁が小さくなったおかげで、バラエティに富んだ人選が可能となり、地球の裏側からご講演、といったこともできるようになった。視聴学生の人数も対面の時より大幅に増加し、講演後の質疑応答においても、Q&A 機能をうまく活用することで活発になったと感じる。コロナ禍が解消し、授業が対面メインとなった今でもシンポジウムだけはオンライン開催を続けている。

平成 4 年(1992 年)7 月に、進学情報センターニュース第 1 号が創刊された。そこからほぼ年に 3 回のペースで発行を続け、33 年の時を経て本号が記念すべき 100 号になる。第 1 号から第 19 号までは B5 サイズ、第 20 号から本号まで A4 サイズの体裁で発行されている。ニュースというからには速報性が問われる。その中身は、進学情報センターの紹介、シンポジウムの案内、後期課程の紹介・宣伝など多岐にわたっているが、手にした学生にとって、最も重要かつ注目となったコンテンツは、「進学志望者の集計表」であることは間違いなかったであろう。学生はこの集計表をもとに、志望登録の変更などを行った。いち早く大事な情報を学生に届けようという姿勢は、このニュースにおいても発揮されていた。現在は集計表や内定者情報に「評点」の情報を入れることができなくなっており、学務情報システム UTAS に「必要な情報を学生に伝える」という役割を譲っている。

私自身は、那須先生が進学相談室担当になった年度に入学し、進学情報センター開設直前に進学振分けを迎え、教養学部基礎科学科第一に進学内定した。そのあたりの経緯はセンターニュース 74 号にぶちまけたのだが、いろいろと悩んだ末、最終的には「ケセラセラ」の境地で志望登録したと記憶している。「進学相談室」さえ設置されていなかった那須先生の頃と比べるのはおこがましいが、私の時でも進学先の情報はかなり少なかった。文系専任教員の永井久美子先生は進学情報センター開設後に進学振分けで教養学部教養学科第一に進学内定された。このことは、進学情報センターニュース 76 号で述懐されている。後期課程への進学を考えるときに、那須先生や私のように、「進学情報センターのような施設があれば…」という思い、永井先生のように「進学情報センターがあってよかった…」という思いが、我々センター所属教員の、進学に関する情報の提供や相談といった業務に取り組むモチベーションになっていることは間違いない。「学生がより良い進路を選択できる」ために支援をすることが、進学情報センターの至上命題であり存在意義である。センター設立当初の、那須先生をはじめ、関わってきた様々な教職員の理念を変わらず継承して今のセンターがあるのだと思うと、「充実したものになった」との那須先生のお言葉は非常にうれしく思い、同時に、これからも真摯に学生と向き合ってゆこうという気持ちにもなる。

東京大学は、前期課程学生（学部 1、2 年生）に幅広い「教養教育」を提供するとともに、専門分野(3 年生以降の後期課程)を 2 年次の夏に決定する「レイト・スペシャリゼーション」を旨としている。この、国内ではユニークともいえる教育システムがあるがゆえに、進学情報センターの果たす役割は大きい。この度東京大学に入学してきた新入生、これから進学選択を控える 2 年生には、是非ともこの進路再考の「緩衝期間」を有意義に過ごしてほしい。東京大学へ入学を決めた理由は人それぞれであろう。学生の皆さんには、進みたいと思っている専門分野が決まっている、いないに関わらず、広範で深淵な教養の海でもまれ、自身の存在意義を再構築していただきたい。その上で、進学選択は勿論のこと、進路等について悩んだときには是非とも進学情報センターを活用していただきたい。進学情報センターは、文字通り進学に関するありとあらゆる情報が、これはデジタルアナログに関係なく、会合・蓄積される場である。「進学振り分け」から「進学選択」へと制度の変遷はあれ、35 年に及ぶセンターのリソースを利用しない手はない。昔と変わらず 1 号館 2 階にある進学情報センターに訪れて、ご自身の納得できる進路を実現してみてほしい。

那須先生のもう一つの顔を紹介しよう。先生は、教養学部初めての理系の後期課程「基礎科学科」立ち上げにも重要な役割を果たされている。自然科学をベースとし、新たな学際領域を創出できるような人材を養成すべく設置されたこの学科は、実際、ノーベル賞を受賞した大隅良典先生をはじめとして多くのユニークな人材を生みだしている。すなわち、駒場において、二つのエポックメイキングな組織の創出に携わったのが那須先生なのだ。今あるセンターの土台をつくりあげ、今もなお温かく見守ってくださっている大先輩に深く感謝を申し上げ、筆をおきたい。